2017/04/09 受難節第六主日礼拝

「神の御子の絶望」

マルコ 15:21-41

【聖書箇所】抜粋

33 昼の十二時になると、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。三時にイエスは大声で叫ばれた。34「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

1. 神の御子の受難

神の御子は排斥され捕らえられ拷問され、死刑の判決を受けて十字架の上へとあげられました。沈黙が彼を覆っていました。不眠不休の裁判に続くローマ提督ポンティオ・ピラトからの尋問。マルコの福音書では、その尋問以来、主イエスは一言も語らず、黙々とローマ兵による拷問や侮辱に耐えました。当時の拷問は鞭打ちでしたが、鞭の先には大きな釘のようなものがつけられていたそうです。皮膚が裂け血と肉が飛び散るような鞭打ちであります。弱った主イエスに茨の冠と紫の服を着せ、「ユダヤ人の王ばんざい」とからかい侮辱の限りを尽くすローマ兵。精神的にも肉体的にも限界が近い主イエスは死刑場にむけて３０キロ以上ある十字架の横木を担いで歩きます。何度も倒れて道行は止まった・・と伝えられています。それ以降はさきほど、司会者の方に読んで頂いた通りです。

今日は、主イエスが息を引き取られる寸前に叫んだ「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」という言葉に集中します。何故なら、ここに主イエス・キリストの十字架が集約されていると考えられるからです。それは、この主イエスのお言葉が、アラム語で書かれている・・という事から判ります。

マルコ福音書は主イエス・キリストの十字架と復活の出来事のあと、３０年から４０年ほどして書かれたもの・・と言われています。その頃になると十字架と復活の主イエスと実際に出逢った人々がどんどん亡くなり始めていた。信仰を次代に伝える必要がでてきたのです。それで、マルコの教会の中

に様々に残されていた言い伝えをまとめて書かれたのがマルコの福音書と呼ばれています。最初の主イエス・キリストの十字架と復活の物語です。

マルコの教会では日常語としてギリシア語が話されていました。ですからマルコ福音書はギリシア語で書かれています。一方、主イエスやお弟子さん達の日常語はアラム語です。マルコの教会は普段自分たちには馴染みのないアラム語で、主イエスの最後のお言葉を覚えていたのです。「エロイ・エロイ・レマ・サバクタニ」・・「我が神、我が神、なぜわたしをお見捨てになったのか」という意味です。しかし、これをギリシア語に訳して覚えたのではないのです。神の御子の生々しい最後の叫びに似た祈り声を、声そのものを繰り返すかのように、アラム語そのままに記憶に刻んで四十年近く繰り返し伝えてきたのです。十字架上の最後の主イエスのご様子を、教会が忘れまい・・としてきた事が判るのです。ですから、この言葉を中心に見てまいります。

2. 詩篇２２編を唱えておられたのか。

「我が神、我が神、なぜわたしをお見捨てになったのか」―神の御子らしからぬ言葉に聞こえます。決して勇ましい言葉ではありません。力強い信仰の言葉にも聞こえません。私は最初、どうもこの言葉に強い違和感を覚えていました。神の御子が雄々しく十字架に耐えたのなら判る。でも最後の最後になって恨みがましく「なぜ私を見捨てたのか」と叫ぶのは、主イエスらしくないのではないか？

そう感じていたのは私ひとりではなかったようです。この言葉は、ルカの福音書とヨハネの福音書には出てきません。マタイとマルコのみがこの言葉を記録しているのです。皆が躓くこの言葉・・主イエスはなぜこのような言葉を最後に仰ったのでしょうか。いよいよ奇妙です。

様々に考えられてきました。最も説得力を持つものが「主イエスは最後に詩篇２２篇を唱えようとしていた。しかし、最初だけで命が尽き果てた」という解釈です。

詩篇２２編とは次のような言葉で始まります。「わたしの神よ、わたしの神よ／なぜわたしをお見捨てになるのか。なぜわたしを遠く離れ、救おうとせず／呻きも言葉も聞いてくださらないのか。」確かにこの「エロイ・エロイ・レマ・サバクタニ」とほぼ同じ言葉です。詩篇２２編には、他にも主イエスの十字架を思わせるような言葉がでてきます。自分の窮状を神に訴え、見捨てないでください・・という訴えを連ねます。そうして、最後は主なる神への賛美と変わる詩篇です。素晴らしい祈りの詩。イスラエルの人々も愛し繰り返し唱えた詩。主イエスが十字架の上で「わたしの神よ、わたしの神よ、なぜ私をお見捨てになるのか」と叫んだ時、敬虔なユダヤ人は、「この方はこのような時であっても詩篇２２編を唱えておられる」とすぐにわかったでしょう。詩篇２２編を唱えつつ、主は息をひきとった・・そう考えるのが、神の御子にふさわしい死なのかもしれません。多くの方々が「詩篇２２編を唱えながら、主イエスは力つきた」と言っており、有力な説であります。

3. まことの罪人として死んだ神の御子

しかし、私は「詩篇２２編を唱えながら力尽きた」というふうには考えません。何故なら、主イエスはこの時、正真正銘、絶望しておられた・・と考えるからです。主イエスは神の御子です。その神の御子が「エロイ・エロイ・レマ・サバクタニ」「我が神、我が神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれたのです。ですから、まさにその言葉通りのことが起こっていました。父なる神は十字架の上で肉体が静かに裂けながら苦しみのたうつ我がひとり子、神の御子を見捨てたのです。それは、３３節に「全地が暗くなった」とある事からも判ります。

神の御子が神に見捨てられた。この世にはありえない関係、切れる筈のない神と神御子の関係が一方的に絶たれました。もう、主イエスは子なる神ではなくなった・・と言ってもよいのであります。一番いて欲しい時に、その愛を注いで欲しい時に、神は背を向け去っていかれたのです。それが「昼の十二時から全地が暗くなり、それが三時まで続いた」という三時間の間に起

こっていたことです。当時のイスラエルの時間の単位は今でいうとだいたい三時間。つまり最小の単位の時間、ひと時、父なる神は主イエスを完全に捨てた・・という意味であります。ここに言い尽くせぬ神の御子の悲惨があるのです。

主イエスの十字架は十分に残虐です。しかし、世界の歴史を眺めればもっと凄惨な方法で殺された者たちは沢山います。ですが、この十字架上の主イエスほど完全に全く神から見捨てられた人間はいないのです。何故なら、このお方が神の御子であるからです。私たち人間は神が見守っていてくださっていたとしても、なかなか神の愛を知る事ができません。そうして「神に見捨てられた」と絶望します。しかし、神の御子が絶望する時、それは本当に神がおられない時なのです。父なる神は子なる神を完全に徹底的に、疑いようもなく御子イエス・キリストを見捨てました。捨て去ったのです。

三位一体と言われる神が、そのあり方を変えたのです。永遠の昔、時間が流れ始める前、父なる神が子なる神を愛した。子なる神もまた父なる神を愛した。父なる神と子なる神の愛のある交わりにより聖霊なる神が生まれました。永遠の昔からの三位一体の神。その神を神とする交わりが絶たれて子なる神を見捨てたのです。これは有り得ない事、人間の私達には考えられない事です。父なる神、子なる神、聖霊の神の三位一体の神、三つにして一つの存在。永遠で全知全能の完全なる絶対者。時間さえも作り、全てのものを作り、命を作り出す三位一体の神。引き離して考える事など出来ないこと。天地万物を創造する前から一体であった父なる神と子なる神。その父なる神が子なる神を捨て去る一歴史上、それまでもなかったし、その後も二度とない事が起こった三時間だったのです。しかし、その時、それに気づいていたのは、十字架の上の主イエスただお一人でした。

この時の御子の苦しみをどう喩えたらよいのでしょうか。言葉ではいい表せない苦しみ、絶望。生きながらにして半身をもぎ取られ、なおも、死ぬ事が許されず孤独にひとりで惨めに十字架上で苦しまなくてはならない。徹底的な孤独、痛み、絶望。なんの罪も犯してはいない、まことの人イエス。い

つも神の御心を知り、徹底的に父なる神に従い、ついに十字架の上で苦しむまでに従順であった神の御子。そのまことの人、まことの神。しかし、今や、まことの罪人でした。主イエスはいまや完全に徹底的に神に見捨てられ、まことの罪人として十字架の上に苦しまれたのです。改革者ルターは「主イエスだけがまことの罪人として死んだ」と言いました。

罪人とは、何か？―神を見出し得ない存在です。まことの罪人とは、まことに神が見出し得ない存在・・つまり本当に神から見捨てられた存在なのです。人間が経験する事のない絶望。その時、神の御子が叫びをあげざるを得ないまでの絶望がここにあります。それが神の御子の十字架であったのです。

4. キリストの信仰によって

この絶対的な棄却の中、自分を完全に見捨てて去った父なる神を、まだ神として主イエスは呼んでおられます。決して私たち人間のように「神も仏もあったものか！」とは叫ばない。「私をこのようにあわせた父なる者よ、呪われろ」とも言わない。ただ「我が神、我が神、どうしてこの私をお見捨てになったのですか」と苦しいさなか、もう息も絶えようかという時に声を限りに叫びます。聖書では二度名前を呼ぶ・・というのは、大切な人への呼びかけでした。心を込めて呼ぶ時に聖書では名前を二度繰り返して呼ぶのです。この時の主イエスもそうだったのです。人間ではできぬ神への叫び、祈りです。絶望の祈りです。自分を捨て去る神。そのお方をなおも「わたしの神」として呼びかける。人間が達し得ぬ絶望の深い深い奈落の底にあっても、主イエスは神を神とする事を諦めなかったのであります。これが主イエスの信仰であります。

神の御子がまことの罪人になってくださった、そこで神を神として叫び声を上げてくださった、その主イエスの徹底した信仰によって、私たちの罪はゆるされました。神のみ前に出る事ができるものとされたのです。私たちの信仰ではありません。本当に真実に父なる神に見捨てられた時でさえ、「我が神、我が神」と祈った主イエスの父なる神への信仰のゆえに私たちは義とさ

れ、愛なる神のみ前に出る事を許された存在となったのです。ガラテヤ書２：１６にはこうあります。「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました」主の絶望の中の信仰が私たちと神の間にある壁を取り去ったのでした。38 節、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた・・と言われているのはこの事です。エルサレム神殿には大祭司しか入れなかったという最も神聖で重要な「至聖所」と言われる場所がありました。その至聖所は天井から下がる大きな幕で区切られていました。私たち人間と聖なる神を隔てる幕と言われていました。その幕が、主イエスの十字架の死の直後に真っ二つに裂けました。それまで神と人間の間を隔てていた人間の罪が赦された・・という象徴的出来事と言われています。私たちは、絶望の中にあっても徹底的に信じ抜いた主イエスの父なる神への信仰によって罪が赦されたのです。

5. 人間の絶望と神の御子の絶望

私たちの人生にも、様々な困難があります。時には言葉が見つからない、絶望としか言えないような状況があります。子どもや親など親しい人をなくした時。輝かしく続くと思われた未来が急に断ち切られた時、言われない誹謗中傷に心傷つくとき、誰からも必要とされていない孤独に苦しむとき、自分の犯した罪の結果を見て恐れおののくとき、耐え難い肉体の痛みに襲われる時、また襲われるのではないかという恐怖にある時、食べるものも着るものもなく寒さに震えて死にそうになる時、病に冒されて痛みにもがき苦しむ時、生きている意味が見いだせない時・・人間は様々に絶望します。

このように状況は様々であっても、人間の全ての絶望の根幹には「神に見捨てられた」という思いがあるのではないでしょうか。神の存在を知らない人にははっきりとした認識はないかもしれません。しかし、絶望とは生きていく望みを絶たれる・・という事です。人間が人間として生きていこうとする力―それは神から来ています。人間は神に創られたものなのですから。ですから、全ての人間の絶望の根源は、「神に見捨てられる」という事なのです。

創造主であり愛なる神が自分を見捨てた・・と感じる時、人間は絶望します。深い奈落の底へと沈むのです。私もかつて主イエスに出会う前に深く絶望していました。その時の自分の心の奥底には「誰も私を必要としてはいないし助けてもくれない」という確信があったのです。じつに地獄とは血の池が広がる所でも鬼が責め立てる所でもありません。神を見出し得ない所なのです。神を見出し得ない所で人は絶望するのです。

それは主イエスも同じです。ただ人間と違うのは、主イエスは、神を見いだせないのではありません。本当に神がいなくなったのです。ですから、主イエスの絶望は、私たち人間の絶望とは比較にならぬほど深く絶対的なのです。絶対的な絶望です。人間の陥るどんな悲惨も絶望も、この神の御子の悲惨や絶望と比較すれば悲惨とも絶望とも言えない・・そういう所に主イエスは徹底的に放り出されました。カルヴァンはこの十字架上の主イエスの叫びをもって、「この時、主イエスは既に陰府にくだられていた」と言っています。

ですから、私たちがもうこれ以上の苦しみや絶望はない・・と思う時でさえ、主イエスはさらにより以上の苦しみや絶望を経験されている・・と言えるのです。

そして、だからこそ、主イエスは苦しむ全ての人々を真に慰める事ができるのです。共に苦しむ事ができるからです。私たちが自分の苦しみ・嘆き・絶望の中に佇んでいる時、私たちは聴く事ができます。私たちよりももっと深い深い淵の底から祈る主イエスの「わが神、わが神」という十字架上の叫びを。そうして深い淵から響き上ってきた主イエスの祈りは苦しみ嘆く私たちの傍らへと寄り添うのです。祈りは魂にしみこみ、神の御子が私と同じ悲しみに沈み、苦しむ私の痛みを共に耐えてくださっている事が判るのです。

同じ痛みを、悲しみを共にしつつも主イエスは私たちのように神を否定しません。悲しみに打ち砕かれ苦しみに呻き疲れて「神なぞいるものか」と自ら神から離れ去ろうとする私たち人間。主イエスはそのようなひとりひとりの人間を憐れまれます。神を見失いそうになる人間をかわいそうに思ってく

ださいます。そうして絶望に呑み込まれてしまう私たちの代わりにご自身が「我が神、我が神」と祈ってくださるのです。この祈りこそが神を見失った人間を神に向かわせます。「あなたが仮に今、祈れないとしても、私があなたの代わりに祈り求めましょう」と苦しむ私たちの傍らにとどまって祈ってくださるのであります。「わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。 」（ローマ書 8:26）とある通りです。神の御子が代わって神の御名を呼び求める・・そこに希望の光が生まれ救いが生まれます。ですから私たちの絶望は絶望ではなくなります。どんなに深い淵であろうとも、そこには必ず十字架の主イエスがおられ、私たちと共に苦しんで慰め励ましてくださるからです。

私はこの絶対的絶望にある主イエスを考える時、イーゼンハイムの祭壇画を思い出します。週報の裏面に印刷しています。ごらんください。イーゼンハイムというのは昔ドイツにあった修道院の名前です。この修道院には、とてもリアルに描かれた主イエス・キリストの磔刑の祭壇画がありました。この主イエス・キリストのお姿は、ある病気にかかった人の姿だと言われています。聖アントニウス病と言われる病気。１５世紀から１６世紀のヨーロッパで大流行した伝染病でした。発疹から体が壊死していく怖い病気です。イーゼンハイムの修道院はこの聖アントニウス病の治療院として有名でした。体が壊死していく忌まわしい病気にかかった者は人間としては扱われなかったのでしょう。そんな故郷の町や村を出て、弱った体を引きずるようにイーゼンハイムへと向かう。歩けなくなれば体を這うようにしても向かう。沢山の人が途中で息たえたでしょう。もう人間とは思えない、生きている意味も見いだせない・・ただイーゼンハイムへ！イーゼンハイムへ！ヨーロッパの各地から多くの患者が苦痛にあえぎながら修道院にたどり着きます。やっとたどり着いたイーゼンハイム。そこで彼らが目にする祭壇には自分と同じ病に苦しむ十字架上のイエスの絵が掲げられています。神の御子が自分と同じ病気で、自分以上に苦しみ、自分のために祈ってくださっている・・この祭

壇画のもとで主イエスの絶望によって希望を与えられた患者たちは、手足の切断という壮絶な痛みを伴う辛い治療を決断したそうです。

さらにこの日本での六年前の 2011 年 3 月 11 日の 3 日後 3 月 13 日の例をあげる事もできます。2011/3/11 は金曜日でした。あっという間に多くの人の命が失われていきました。その震災のわずか三日後、三月十三日の日曜日、被災地の殆どのキリスト者は日曜日の礼拝を守ったそうです。驚くべき事です。人々は「神よ、なぜですか、私たちをどうして見捨てたのですか」と嘆くために礼拝に集ったのです。悲しみと失意の中にあって祈りの言葉もなく十字架の前にぬかづく人々の先頭で主イエス・キリストが祈っておられるからであります。

6. 主の傷が私たちをいやす

生きることは大変なことです。私達は様々に痛み苦しみ悲しみます。自分の罪故の苦しみもあるでしょう。また周りの人の罪故の痛みもあるでしょう。また、この社会全体の歪みの為の悩みも絶望もあるのです。誰かのせいにできるほど単純ではない。また災害による痛みも大きい。病気もあります。私達は徹底的に打ち砕かれることがあるのです。生きることは大変だとしか言えないことが多々ある。

しかし、私達の痛みや苦しみ、悲しみをはるかに凌ぐ苦しみや痛み、悲しみを覚えた主イエスを思うとき、主の絶望の深さこそ神の愛の深さなのだと判ります。主イエスの絶望は絶対的に深いのです。しかし、それと同じように神の愛もまた絶対的に深いのです。主が受けた傷の痛み、神の御子の痛みが鋭ければ鋭いほど、神の愛は真剣なのです。十字架上で叫ばねばならぬほど、神の御子は弱くなってくださいました。その徹底的な神の御子の弱さは、神の愛の徹底的な強さを私たちに示しています。私たちが体験する苦しみや痛みをはるかに超える痛みや苦しみや嘆きを持ってまで私たちを愛してくださる神の深く大きく強い愛をこの身に感じます。この神の深い深い愛こそ、人生の中で自分や他の人の罪によって、また病や社会の不条理によって傷つ

けられ呻き苦しむ私たちをいやすのです。Ｉペトロ２：２４ではこうあります。「そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。」この神の愛の中に生きる者、それがキリスト者―クリスチャンであります。人の思いをはるかに超えた強く大きい神の愛のもとに生かされているのが、いま、神を礼拝している私たちです。

今週は受難週です。主イエス・キリストの十字架のみ苦しみとそれによって示された神の深い愛を想い、十字架の主イエスと共にこの一週間を歩もうではありませんか。

祈ります。

「神の子イエス・キリストの福音の初め」―マルコは福音書をそのように語り始めました。そして、父なる神よ、驚くべきことに十字架のもとに立っていた百人隊長―神を知らない人々と言われた異邦人であるこの男は叫びました。「本当にこの人は神の子だった」。十字架の上での主イエスの絶望の声がこの男にそう叫ぶ信仰を与えました。私達もまた百人隊長に合わせて叫びます。ほんとうに、あなたは神の子です。十字架の主よ、あなたこそが、私たちの悲惨と高慢と怠慢と偽りを打ち砕く希望の光です。神殿の幕が裂かれ、ユダヤ人と異邦人の差別はなくなりました。神と人を隔てる壁が取り払われた時、人と人を隔てる壁も取り払われました。百人隊長は今あなたのみ前にたっています。私達も今、あなたのみ前にたっています。ここに新しい神殿が生まれました。十字架の前に立つわたくし達を神殿としてくださる主イエスと父なる神よ、その深い愛に心より感謝します。どうかわたくし達があなたの十字架のもとより、歩みだすことができますように。十字架の主のあとを従って神と人を愛して歩むことができますように。主イエス・キリストのお名前によって祈り願います。アーメン。